K220.72
74a
1

一　本書毛筆手本の部の輪廓は、從來の手本の形式とちがつて半紙一枚の輪廓を縮めうつしたものですから、その中の文字の位置は卽ち半紙面の字配であります。

一　ペン字手本の文字の大さは、習ふ場合の文字の大さを示してあります。そのつもりで夫々用紙を選定して下さい。

中學校用

春堂習字帖

上

東京　合資會社　育英書院發行

三四五

上中下

四月十九日

一年生　小野道風

山川水
日月星

五月三日　一年　組　藤原行成

足走及

少步多

子手承家

衣良長辰

思見武風

局菊馬鳥

炙受愛美

善其真與

春夏秋冬

寒暑涼暖

甲乙丙丁戊

己庚辛壬癸

子丑寅卯辰
巳午未申酉
戌亥

一年口組
阿倍仲麿

内外表裏明
暗高低輕重
深淺遠近

忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ
惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ
華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ
自彊息マサルヘシ

郵便電話

貯金爲替

府縣國郡

市區町村

いろはにほへ
とちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ

うゐのおくや
まけふこえて
あさきゆめみ
しゑひもせす

都大路の朝霞たなび
きわたる青柳の千本の
緑くゞりつゝ軒端に来
たるつばくらめ

秋は農家の祭日大事な
交際季節である風の心配
もどうやらかうやら通り越し
て先づ收穫の見込がつくと
何處の村でも祭をやる

天長節觀兵
式拜賀鎮守
氏神豐年祭

明治天皇御製

たらちねのみ親のをしへ
あら玉のとしふるまゝに
身にそしみける

平野次郎敬書

敬神愛國

報本反始

學ヲ修メ
業ヲ習ヒ

智能ヲ啓
發ス

修學習業

啓發智能

盛年重ネテ來ラズ

一日再ビ晨ナリ難シ

盛年不重来

一日難再晨

時ニ及ビテ當ニ勉勵スベシ

歳月人ヲ待タズ

及時當勉勵

歳月不待人

龍ハ洞門ヲ出デテ常ニ雨ヲ作シ鶴ハ松樹ニ巣クウテ年ヲ知ラズ

龍出洞門常
作雨鶴巣松
樹不知年

元旦試筆　菅原道真

案内者に導かれて祓川の霧島神社に参詣し、さていよ〳〵霧島山に登る。始めは木立の中を行つた。これが少くとも十二三町はあつた。朝の露の乾かない草原がやがてそれに續いた高千穂から、渦巻き上る白い雲がもく〳〵と朝日を掠めては霽れ掠めては霽れてゐた。私達はやがてその草原を通つて森林帯を目の下に見るやうな所に来た。それにしても何といふ好い眺望だつたらう。昨日通つて来た道は一目に見える。高原の町などは直ぐ目の下に見える。狭野の杉の並木が朝日を帯びて光つてゐる。右には御池小池などいふ池の静に湛ひてゐるのが見えた。

馬を牽き鋤を肩にして帰る農夫の後につきそひ
眺め飽かぬ川の畔をさまよひ帰るに俄に鳴きい
だしたる蛙の聲に誘はれて友の指さす方を眺む
れば彼方に立てる野中の一つ家あり藁葺の
屋根は春の星を帯びて寂しき中にも深き趣を具
へたるはそも如何なる人の住めるにかあらん。

長途無事本日午後到着表記に
投宿致し候間乍安心下さるべく取
あへず御報申上候
荷物は午前中に着驛
いたし居り
七月十五日夕

東京市京橋區南傳馬町
二丁目五番地
中村貞次郎様

京城本町二丁目
日東館
照治

東京市牛込區市谷
田町二二二
平野梅堆様

郵便はがき

房州保田にて
義信

弟妹と三人で此地に来遊
今日で五日夏は何處も
暑いと妹はつぶやき初
めて海を見て喜んだ弟
もどうやらあきたら
しいから早くきりあ
げて二十日ごろには真
黒くなって
お目にかゝります

暑中お変もなく度いませんでしたか
ずゐぶんしばらくお目にかゝらない
様な氣が致します今年はうちもも
ずゐぶん暑うございましたがこの五六
日に秋めいてまゐりました此の頃は
力強いさびしさのうちに
無言がちの朝夕を送ってゐます
九月五日
御風

中村春堂書

宮田六左衛門刻

7220.7

310
328

大正十五年十月五日印刷
昭和十年十一月十日發行
昭和二年一月六日訂正再版印刷
訂正再版發行

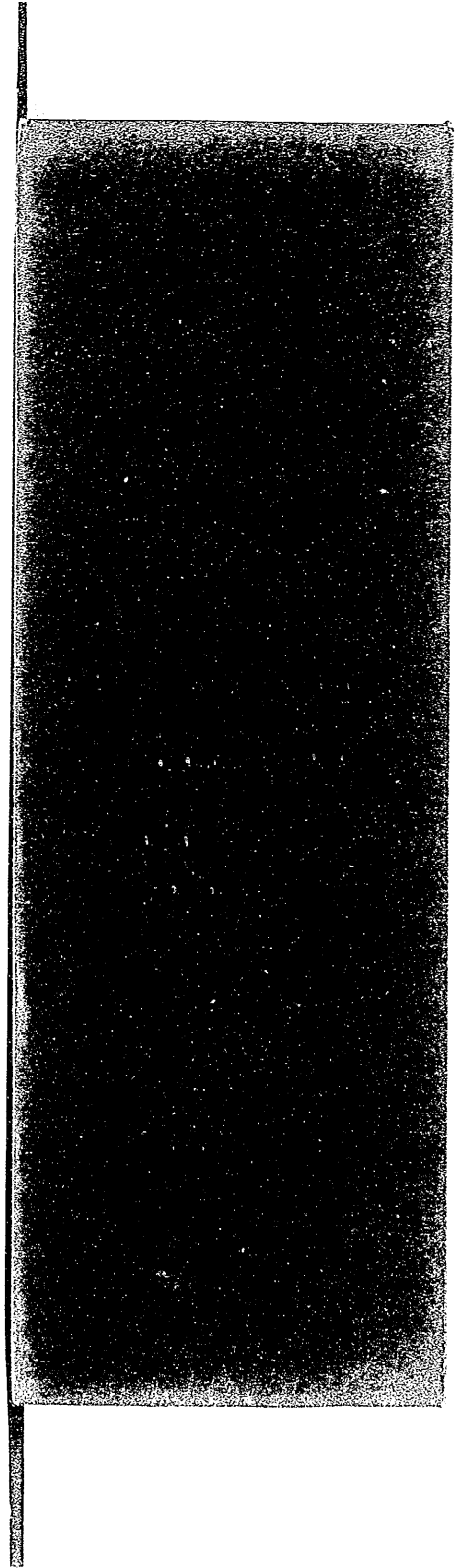
著作權所有

著者　中村梅太郎

中學校用　春堂習字帖全三冊
上、中、下卷　各金貳拾六錢
昭和二年愛藝堂復刻　上、中、下卷各金四拾四錢

發行兼印刷者　東京市牛込區白銀町廿九番地
合資會社　育英書院
代表者　倉田八十八

精興社印刷

發行所　東京市牛込區白銀町廿九番地　振替口座（東京）七四二番
合資會社　育英書院

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番
目黑書店